Executive Summary

グローバル化は後戻しすることのできない大潮流である。途上国といえどもその影響の外に逃れられない。グローバル化に対応して世界貿易体制を再構築し、その中でどのようにしたら、すべての途上国がグローバル化の恩恵を享受しながら攪乱を最小限にとどめるように、組み込むことができるか。２月にバンコックで開かれた第10回国連貿易開発会議（UNCTAD）にはWTOやIMF、世銀等の国際機関のトップも参加して、グローバル化への途上国の参加が途上国自身にとって不可欠であることが強調された。

UNCTADは1964年に第１回会議が始まり、以後４年おきに世界各地で開かれ、途上国が先進国に要求を行なう場となってきた。1979年のメキシコのカンクン会議では途上国に有利な「新しい世界経済秩序（NIEO）」の創設を要求するグローバル・ネゴシエーション（GN）が叫ばれた。2000年３月初めにジュネーブでWTOが「途上国のための特別で有利な待遇」と題するセミナーを開いて、途上国が新ラウンド交渉に参加するにはどのような条件が満たされなければならないかが議論された。UNCTAD事務局も積極的に参加した。無差別待遇の原則を遵守するWTOでは、すべての加盟国は平等の条件で参加する。しかし現実に途上国は各種のハンディキャップを負っている以上、何らかの「特別で有利な待遇」を途上国に与えようという考え方である。

1960年代、UNCTADは途上国のために一般特恵関税（GSP）と一次産品商品協定を勝ち取って、途上国に有利な貿易環境を整えた。ただしその実効のほどはエコノミストの間で評価が定まっていない。1979年のGNは失敗して、先進国にUNCTADを敬遠する性向を植え付ける結果となった。1995年にブラジルのリクーペロ氏が事務局長に就任してから、UNCTADは現実的、柔軟な姿勢に転じている。今回もWTOと協力して新千年紀ラウンド交渉に途上国にとって実効のあがる参加方式を作り出そうとしている。「特別で有利な条件」とは貿易自由化で差別をつけるだけではなく、税関手続きや基準認証の法整備等で様々な技術援助を提供して、途上国が実質的に世界貿易体制に参加できる能力を増強することも含まれている。

第10回UNCTAD総会へ提出した事務局長報告（Report of the Secretary-General of UNCTAD to UNCTAD X, 29 July 1999）の冒頭に『市場統合を超えて - 安全と発展のための協力と知識共有の世界大の共同体を目指して』と題される『個人的回想』が付されている。その中でリクーペロ事務局長は、「途上国は変

えようもないグローバルシステムに合わせるべくもがくのではなく、自身の発展のペースとニーズに合うようにグローバルシステムを形作るよう働きかけるべき」と励ましている。その中で「UNCTADの役割はグローバル化を理解し、説明することに止まらずに、それをより良い方向に変えるべく積極的に関わっていくべき」だと示唆している。

残念ながらUNCTAD、特にその最近の活動は日本ではほとんど知られていない。そこで第10回UNCTAD総会の準備と並行して組織された高級専門家円卓会議の提言要旨を紹介しつつ、UNCTAD活動の回顧と展望をまとめることとした。

第１部　高級専門家円卓会議の提言

UNCTAD事務局は第10回本会議の準備と平行して高級専門家円卓会議を組織し、11名の専門家を招いて、21世紀の途上国の発展努力支援の諸課題を展望した。編著者もそのひとりとして招かれて参加した。各自が別個のテーマを分担したが、資本主義と社会主義の相克、技術修得、開発金融、所得分配、グローバル化、地域協力、１次産品問題、貿易自由化、WTOルール、国際組織改革、農産物貿易と多岐にわたっている。円卓会議の提言は優れた展望を提供しているので、当初UNCTAD事務局と相談して全論文の翻訳刊行を試みたが、諸般の事情で断念し、提言の要旨を紹介するに止めた。

第２部　UNCTAD：その活動の回顧と展望

合わせて、UNCTAD事務局の笠原重久氏によるUNCTAD活動の成果と将来課題の展望を含めた。これは日本ではUNCTADについての知識・情報が不十分ではないかという懸念から、編著者が上記円卓会議のお膳立てをした笠原氏に、特に依頼して執筆してもらったものである。

まず第１章ではUNCTAD発足当時の世界情勢から始めて、発足の経緯、組織構造、その特異なグループ・システム（例の国連統計でお馴染みのグループ１：先進国、グループ２：中央計画諸国、グループ３：発展途上国の分類）とその内部、グループ間での対立と連携を通しての合意形成の決議プロセスが解説される。

第２章ではUNCTADの40年の歴史を回顧し、その成果と方向修正とを辿る。それは「国連の10年」の1960年代の華々しいデビューに始まり、1970年代の経済ナショナリズムの動乱の中での先進国との対立に続く。しかし1980年代の世界不

況、後半から1990年代前半にかけての東西関係の大変動の中で方向修正を余儀なくされる。先進諸国との協調を優先する現実路線を選択するに至る。笠原氏は、世紀の変わり目の現在はUNCTADはなお組織存続の危機の中にあると見る。

第３章ではUNCTADが現在抱える諸問題を、役割と運営、グループ・システムの変貌、他の国際機関との関係が分析され、その上でUNCTADの将来果たしうる役割が提示される。しかしWTO閣僚会議が失敗し、新ラウンド交渉の立ち上げには途上国の取り込みが不可欠と見なされている 21 世紀の初めには、UNCTADは新たな役割を与えられるのではなかろうか。同氏は、初め英語で執筆して、UNCTAD事務局の同僚に読んでもらったが、このままでは率直過ぎて事務局の正規の承認を得られそうもないが、日本語でなら良いのではないかというのでこのまま公表することにした。

第２章後半から第３章が日本で知られていない部分だが、UNCTADの発足時をご存知ない若い読者には、ぜひ第１章の発足の事情と特異な組織・決議プロセスを理解してから、読み進んでいただきたい。類書が皆無な現状では、途上国問題に関心をもつ方々のお役に立つと信ずる。